

ユーゲント・

フィルハーモニカー

第3回特別演奏会

2022年9月18日(日)18:30 鎌倉芸術館 大ホール

ごあいさつ

本日は、ユーгент・フィルハーモニカー 第3回特別演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

コロナ禍での当団の活動も遂に4シーズン目を迎えました。高校選抜オケを母体とする当団だからこそ、「この状況で最も大きな打撃を受けているであろう高校・大学オーケストラの皆様にも少しでも益することができれば」との思いから、今回の演奏会に併せて参加型ワークショップを開催しました。

高校生・大学生の有志の皆さんと音楽を作り上げる時間は短いながらも刺激に満ちており、改めて音楽の素晴らしさを実感することができました。ユーгент・フィルと高校生・大学生の競演にご期待いただければと思います。

さて今回は、当団初めての公演地となる鎌倉芸術館にて、ワークショップ参加者の皆さんとの共演でワーグナーの『マイスタージンガー』前奏曲、当団が誇るコンサートマスター清水貴則との共演によりチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲、そしてブラームスの交響曲第2番をお届けします。初秋に相応しい、どこか懐かしい雰囲気を持った名曲プログラムをお楽しみいただければ幸いです。

最後に、今回の演奏会の開催にあたりご協力を賜りました皆様、そしてご来場いただいた皆様に改めて御礼を申し上げます。今後も当団の活動にご愛顧を賜りますようお願いいたします。

ユーгент・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

プログラム

ワーグナー：

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』

第1幕への前奏曲

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲

独奏＝清水貴則

— 休憩 20分 —

ブラームス：交響曲第2番

(終演 20:50 頃)

指揮＝安齋拓志

演奏中にスマートフォン等でパンフレットをご覧いただけますが、音が出ないように設定の上、画面を暗くするなど周りの方への配慮をお願いいたします。

指揮 安齋拓志

福島県出身。3歳よりピアノを故大内洋子氏に師事。福島高校管弦楽団でヴァイオリンを担当し、これまでにNHK交響楽団の木全利行、篠崎史紀の両氏らに師事。全日本高等学校選抜オーケストラのオーストリア公演に3年連続で参加。立教大学交響楽団においてコンサートマスターを務める傍ら、故佐藤功太郎氏の薦めで指揮を始める。卒業後は桐朋学園大学、国内外のセミナーにおいて学ぶ。



これまでに指揮を故佐藤功太郎、河地良智、湯浅勇治の各氏らに師事、これまでに数多くの演奏会の副指揮者・客演指揮者を務める。2006年にユーゲント・フィルハーモニカーを創設、農村でのオーケストラ演奏会を指揮するなど意欲的に活動し、それらの音楽活動が読売新聞全国版に度々取り上げられる。2012・2013年には国立競技場においてアイドルグループ嵐のコンサート「アラフェス」のオーケストラと合唱を指揮するなど、クラシックの枠にとらわれない様々な活動を展開している。

現在ユーゲント・フィルハーモニカー音楽監督。2017年からは全日本高等学校オーケストラ連盟の高校オーケストラ支援事業を担当、数多くの音楽事業をオーガナイズし青少年の音楽教育にも力を入れている。

独奏 清水貴則

4歳よりヴァイオリンを始め、これまでに日高毅氏、小森谷巧氏に師事。

第3回万里の長城杯国際音楽コンクール審査員特別賞、第12回日本クラシック音楽コンクール小学校の部審査員特別賞を受賞、同コンクール第14回中学校の部、第17回高校の部にて全国大会入選。2022年、第2回杉並公会堂ベヒシュタイン室内楽コンクールにピアノトリオ"Quodlibet"で出場し第3位を受賞。

学生時代は早稲田大学交響楽団に所属しコンサートマスターを務め、メンデルスゾーン作曲ヴァイオリン協奏曲のソリストとして同楽団と共演した。都内アマチュアオーケストラをはじめ、室内楽も組み、精力的に音楽活動に取り組んでいる。早稲田大学社会科学部を卒業し、現在、都内の不動産ディベロッパー会社に勤務。



ユージェント・フィルハーモニー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≡プロオケには出来ないこと）」を追求している。



©Ryosuke

曲紹介

ワーグナー：

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』第1幕への前奏曲

ロマン派時代の第一人者であるワーグナー(1813-1881)は、ドイツのみならず、19世紀の欧州の音楽界を席卷した。獄中生活を送った数年後には国王の側近となり、優秀な弟子を指揮者として信頼する一方その妻を寝取るなど、公私にわたるその波乱万丈な人生は常に当時の人々の話題の種だった。破天荒ぶりはその作風にも存分に表れており、登場人物の感情の起伏によって音楽を変容させるその作曲技法は、後世の作曲家に大きな影響を与えた。

『ニュルンベルクのマイスタージンガー』は、1862年から1867年にかけて作曲された。靴屋の親方であるハンス・ザックスが、若きヴァルターとエファの恋の成就を見届ける過程で、ドイツ芸術の素晴らしさを説く内容となっている。

華々しいハ長調で開始されるため誤解されがちだが、本作は「対位法の音楽」である。つまり、「旋律&伴奏」ではなく、「旋律&旋律」、即ち全ての旋律が対等な関係になるよう、基本的には構成されている。一音一音を荘厳に重々しい演奏より、むしろ旋律や対旋律を強調するべく、横に流す演奏が本来であろう。なお、なぜ対位法で作曲されているかということ、中世の音楽理論は和声ではなく対位法が主軸で、そしてマイスタージンガーは15-16世紀の中世の物語だからである。

かつてユーゲントの前身たる日本ユンゲ・オーケストラが、2008年にヨーロッパ公演した際の滞在都市がニュルンベルクで、当地のマイスタージンガーホールが本番会場だった。そして本日の本曲は、高校生を招いての合同演奏となる。コロナ禍で活動が制限される昨今だからこそ、オケをやる感動と熱意を次の世代と共有したい——これはユーゲントが長年大事にしてきた理念でもある。団の発足が間もない時期に、十数年前に由緒正しい会場で演奏した、あのマイスタージンガーを介して、次世代への橋渡しがなされると思うと、非常に感慨深い。

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲

チャイコフスキー(1840-1893)はその親しみやすい旋律と華やかな管弦楽法により、クラシックの入門としても絶大な人気を誇る作曲家だ。存命当時から名声を博していた彼ではあったが、一部の室内楽、および協奏曲に関しては、あまりの譜面の難しさに演奏者が発狂することしばしばだった。

このヴァイオリン協奏曲も例外ではない。1878年に完成した本作は、初演を依頼したアウアーからは演奏を拒絶されてしまった。なお、その3年前の1875年に完成されたピアノ協奏曲も同様に、初演を依頼されたルービンシュタインからは演奏を拒否されている。理由はどちらも同じで、独奏者からすると演奏不可能に思われたからだ。

ルービンシュタインもアウアーも、音楽院の教授職に就いていた点が興味深い。当時のロシア作曲界は中央ヨーロッパに対する劣等感を抱いており、ロシアならで

はの音楽的独自性を模索していた。一方で演奏技術に関しては、むしろ保守的な価値観が主流だった事が伺える。

初演は大好評だったピアノ協奏曲と異なり、このヴァイオリン協奏曲は初演も不評だった。しかし、初演者のブロツキーは作品の真価を世間に認めさせるべく再演を幾度も行った。その過程で本作の評判は高まっていき、遂にはアウアーもその価値を認めるに至る。幾多の非難にもめげず、己の作風を貫き通したチャイコフスキーは、結果的にヴァイオリン演奏の可能性そのものを広げた訳だ。

今回は、コンサートマスターの清水貴則が独奏を務める。ユーゲントの音出し会では頻繁に本作の演奏機会があり、なんならヴァイオリンパートの誰もが内心ソロを弾けると思っているため、独奏の枠はいつも微妙な奪い合いが発生している。そんな腕自慢が揃っているにもかかわらず、清水は常に刺激をもたらす存在で、その音楽性には団員の誰もが称賛を惜しまない。ユーゲントの誇りが魅せるチャイコフスキー、大いに期待して頂ければ幸いだ。

1 楽章：Allegro moderato – Moderato assai

2 楽章：Canzonetta Andante

3 楽章：Allegro Vivacissimo

ブラームス：交響曲第 2 番

1877 年の 6 月、ブラームスはオーストリアのウェルター湖畔のペルチャッハに滞在し、交響曲第 2 番に着手した。同地は避暑地として人気で、ブラームスも大いに

気に入っていたようだ。「この土地にはメロディーが飛び交っているため、踏み潰してしまわないように」と、内気な彼としてはやたらハイテンションな手紙を書き送っている。

そうした土地で過ごした影響もあり、作曲は一气呵成に進み、10月にはほぼ完成した。作曲期間はわずか4ヶ月ほどであり、これは20年余りを費やした交響曲第1番と対比的である。

ペルチャッハの風光明媚な眺めが描写される如く、本作はブラームス作品の中でも明るく分かりやすい曲調となっている。例えば「マイスタージンガー」が本作の10年前に作曲され、3管編成で複雑な対位法を行っていた事を思えば、2管編成で旋律がハッキリしている本作の古典的明瞭さはなおさら際立つだろう。ただし、再現部かと思いきや展開部の続きに過ぎない楽曲構成や、拍子感が希薄なまま突き進む浮遊感など、ブラームス独特の渋みも随所で確認できる。楽器編成としてはコントラファゴットが無くチューバが加わっている事が特徴で、特に4楽章でその管弦楽法の効果が存分に活き、圧巻のフィナーレに到達する。

ユージェントは本作を過去にも演奏した事がある。第5回定期演奏会、2011年3月19日の事だった。東日本大震災のわずか8日後、都内のみならず日本中の殆どの演奏会が中止となる状況下で、決死の想いで演奏会を敢行した、その定期のメイン楽曲がブラームスの交響曲第2番だった。会場も計画停電の影響でロビーが薄暗く、来場できないお客さんも多かったが、終演の際には稀有な感動に包まれていた。

収まりの見えないパンデミックを筆頭に、混乱と不安が広がり続ける社会情勢である。そのような社会で、市民が集ってオーケストラをやる意義はなんなのか？その問いに対する答えは、震災直後の混乱を経て、感染症の渦中の不安を乗り越えて演奏される、「ユーゲントのブラ2」から、きっと聴こえてくるだろう。

1 楽章：Allegro non troppo

2 楽章：Adagio non troppo - L'istesso tempo, ma grazioso

3 楽章：Allegretto grazioso (Quasi andantino) - Presto ma non assai - Tempo I

4 楽章：Allegro con spirito

近藤圭（元団員・思想家）